

見所の小雀（1）

「昭君」を観る ～ 2010年4月7日 国立能楽堂 ～

楊貴妃と並ぶ程の美女で、漢帝の寵愛を得ていたのに、和睦のために胡国（匈奴）の王のもとに嫁いだ昭君。その理由はいずれも美しい3千人の後宮の中から「劣る人を胡国に遣わす」という命令があり、写し絵による選別で、絵師に賄賂を贈らなかったために賤しく描かれしまった昭君が行く羽目になったという。とてもドラマチックで悲劇的なこのエピソードゆえに興味のそそられる能です。

私は初めて観る能でしたから一応謡本なども読んで下調べをしましたが、この日の能は意表を突いた演出でなかなか面白いものでした。梅若玄祥（後シテ）が演出したと思います为名実ともに人気のある人だけに、観客も納得し喜ぶような楽しい工夫が一杯ありました。詞章は謡本と変わりませんが、例えば、まず最初に柳を飾り付けた作り物が出てきます。幕がゆらゆらするので中に人が入っていると思うのですが誰か想像が付きません。そのうちワキが登場し、続いて昭君の老父（前シテ大槻文蔵）、老母が現れ、胡国に嫁いだ娘の予言のように柳が枯れ出したので昭君が死んだのではと悲嘆にくれながら柳の周りを掃いたり佇んだりします。

この場面はシテ、ツレ、地謡ともに憂いに満ちて柔らかく、それが妙に心地良く、見所では眠りにつく人が増える名場面です。よく見ると安座したワキ（宝生欣哉）も目が開いたり閉じたり、そのうち目を瞑ってしまったので、どうなるのかと私はかえって目が離せませんでした。しかし、ここはプロ。「どうして昭君は胡国に行くことになったか」と尋ねる段では目もパッチリ（寝てなんかいないよ!）。この辺りから地謡もぐんぐんと勢いを増し物語の核心を追いながら盛り上がってきました。いよいよ鏡が引き出され、故事のように鏡に柳を映すと娘が現れるのではないかと老母が覗き込みます。

一般的にはここで、前シテは中入りして後シテの胡国の王になって、再登場するのですが梅若演出は違い、老父はそのまま舞台に残ります。そしてまず鏡に映る幽霊として、あの柳の作り物の中から昭君が現れました。昭君の役は普通、子方がするのですが今回は大人。とても可憐で可愛い面を付け、中国風の装束を着た様子はすごく綺麗でした。面が付けられる分美しく、私は子方より良いかなと納得。（でも、いずれ旧来型のも観てみたい）

そうこうしていると胡国の王（これも幽霊）が親に対面しようと橋掛かりから舞台に飛び込んできます。その様相が余りに恐ろしいので親が恐怖に駆られると王もわが身を疑って鏡に映します。自分で見てもやっぱり怖い！そこでの“働き”は、いろいろな道具・人物たちで占められ舞台の3分の1位の狭い空間なのに目を瞠るような勇壮で大胆な動き。観客も高揚してきます。出番は短いのに後シテは見応えがありました。

エンドは、わが身を恥じて逃げてゆく胡国の王。舞台には老父母と鏡に映る美しい昭君の面影が残るというものでした。・・・とうとう私の隣席の若い女性はプログラムの一枚目を開いたまま夢から覚めず能は終わりました。

ところで昭君は、事の是非は別として、なぜ賄賂を渡さなかったのか？の謎。それはいみじくもクセの中で謡われてますが、昭君は美しく帝の寵愛を受けていたので、まさか自分が選ばれてしまうことはないだろうと甘くみていたからだ。美しさの中の間人臭さ。これも能の面白いところだと私は思います。時代を超えて今でも大同小異ながら似たような出来事は一杯あります。例えば自分は重用されているとばかり思っていたら、いつのまにか流れが変わっていて、取り残されていたみたいない経験などなど。能のテーマは古いようでいて、いつも新しく、示唆に富んでいるところが又もや感心する次第でした。（尾崎記）